

地域密着型調査レポート

秩父郡横瀬町 ～ある消滅可能性都市の挑戦～

日本一住みよい、誇れる町へ—— 町の未来は変えられる!!

ぶぎん地域経済研究所 取締役調査事業部長 松本 博之



町の鳥「カワセミ」



町の木「もみじ」



町の花「ちちぶいわざくら」

6月21日に「まち・ひと・しごと創生基本方針2019」が閣議決定され、2014年12月から始まった地方創生の取組みも2020年度から「令和時代の地方創生」として、いよいよ第2フェーズに入ることとなった。これまで「まち・ひと・しごと創生総合戦略」にもとづいて全国各地の取組みを概観するも、実績というといささか寂しいような気がするのも筆者だけではあるまい。その中でも、埼玉県内には小さいがキラリと光るダイヤを見つけることができる。それが横瀬町だ。

横瀬町は都心から70キロを埼玉県北西部、秩父郡にある。人口は、現在約8,200人。1995年をピークに減少を続けており、2014年に日本創生会議が発表し、流行語にもなった「消滅可能性都市」にもなっている。消滅可能性都市としての強い危機感から、町の将来について、当然町単独の資源だけでは限界があると考えた町長は、町外から（特に首都圏）のヒト、モノ、カネや情報といった資源を呼び込み、町に化学反応を起こし、活性化に繋げていきたいと動き出した。さりとて企業誘致といったやり方も難しいとし、そこであるユニークなプロジェクトを立ち上げた。それは秩父郡横瀬町であり、その官民連携のプラットフォーム「よこらぼ」である。

そこで本稿では、“地域密着型調査レポート”として、横瀬町 富田能成町長へのインタビューを含め、「よこらぼ」を中心に横瀬町の地方創生への取組みを考察した。

写真提供：横瀬町



横瀬町のプロフィール

まちのシンボルと言うべき武甲山山麓に広がる自然豊かな町、秩父盆地の南東の端に位置している。武甲山から採掘される良質の石灰石からなるセメント関連産業が中心産業である。最近では、自然の恵みをおおいに活用しての観光関連業にも力を入れている。



■寺坂棚田 埼玉県最大級の棚田で、武甲山を背景に四季の自然が楽しむことができる。一時は耕作放棄地となっていたが、約4ha水田（約250枚）が復活している。



■あしがくぼ氷柱 秩父地域冬の厳しい寒さが作り出すのが「あしがくぼの氷柱」である。山肌を300m以上にわたり作られた氷の造形美、いろいろな角度で見ることができる。



■大持山の雨乞岩 吹き上げる風に「力」を感じるパワースポットとしても認定されており、またビュースポットとしても人気が高い。

■秩父札所巡り 今や中高年だけでなく、若年層、はたまたインバウンドの外国人観光客にも人気になっている札所巡り。横瀬町には「秩父札所巡り三十四ヶ所」の内、札所五番 小川山語歌堂、札所六番 向陽山ト雲寺、札所七番 青苔山法長寺、札所八番 清泰山西善寺、札所九番 明星山明智寺、札所十番 萬松山大慈寺がある。（写真及び詳細については、P44「ぶぎんのある街」参照）



- 自動車 ●関越自動車道「花園」I.C→国道140号→秩父市→「上野町」交差点より国道299号
 ●中央自動車道「八王子」JCT→圏央道「狭山・日高」I.C→国道299号へ
 電車 ●西武鉄道「横瀬」「芦ヶ久保」駅下車

出所：横瀬町観光パンフレットより

「よこらぼ」(横瀬町とコラボする研究所) 官民連携プラットフォーム

3周年の実績とこれからの可能性

「よこらぼ」、一度聞いただけでは何を意味しているかわからないだろう。改めて紹介すると、これは横瀬町が導入している官民連携プラットフォームの愛称である。横瀬町では、民間のアイデアと地域資源を活用して地域活性化に繋げていく取り組みとして、「横瀬町(よこぞまち)とコラボする研究所(よこらぼ)」を2016年9月からスタートさせた。今や、全国的にも注目され、町長を始め、多くの職員が地域活性化関連セミナー等で講演の機会を得ることも珍しくない。ここでは取組み3周年を迎え、この間の実績を概観するとともに、横瀬町全体の地域活性化策との連携、新たな展開を迎えている事業等や、これからの可能性について考える。

*よこらぼの概要については、本誌2017年11月号：町の活性化に向けた挑戦 横瀬町の進める官民連携プラットフォーム「よこらぼ」で紹介している。

「今、そこにある危機」 民間のアイデアを資源に

よこらぼ開始のトリガーとなったのは、町長はじめ町幹部や職員の一致した横瀬町存続への危機感からである。人口減少が進み、ほっておくと横瀬町は日本地図から消えてしまう事態に陥ってしまうと危惧されるなかで、町の課題、“人口減少による町の活力の衰退”や“自らの資源のみによる展開の限界”の克服のため、町の外からアイデアや資源を募集し、それらを具現化したい人たちに対して、横瀬町が官民をあげて協力し、ステージを提供するという新しい仕組みだ。地方創生の気運の高まりという時流にも乗って、また物珍しさも手伝ってか、開始から3年間で、町の期待を上回る実績と波及効果を示している。

外から新しい何かが入ってくることで、それら(ヒト、モノ、カネ、情報)が触媒となって町内に新たな活力を生み、化学変化へと進んでいる。また自分たちにはない知恵は外からのモノの中にあるはずと、敷居を低くして町が対応しているのもこれまでの成功の要因と考えられる。3年目に入った現在、アイデアや資源の持ち込みが事業となって横瀬町をステージとして実現することにより、その実績が新たなアイデアの参入を招くサイクルが生まれ始めたのも嬉しい誤算と言えるのではないか。

多様なプロジェクト—— 予算をかけずに全国に先駆けて

「よこらぼ」は、担当を町長直轄のまち経営課に一元化して、民間企業、NPO法人や個人などから同町で実施したい事業や取組みを募り、審査会で審議の後に採択されれば、プロジェクトとして始動する。審査項目の中で、特に重要視されるのが新規性と将来性である。よこらぼの「どこでもやっていない事業を、全国に先駆けて横瀬町で実施」というコンセプトからだ。その他、町民へのメリットや提案者の熱意等が審査されている。また分野や課題を設定していないのもよこらぼの特徴である。間口を広げることで多様なアイデアが入ってくることに腐心している。これによって多様なプロジェクトを全国に先駆けて輩出してきている。ヒト・モノ・カネ・情報が低コストで継続的に流入している。

「まずは、町の知名度アップ」

これまでのよこらぼの採択事業では、町の予算をかけずに横瀬町のプレゼンスを向上させている。提案者には、採択事業の横瀬町での実績を経て、



他の自治体への売り込みも自由というこにもなっている。いろいろと新しく試してみたいアイデアは持っているが、それを実践するための地方自治体の協力が得られないとする個人やグループにとっては、よこらぼは絶好のステージとなっている。よこらぼのプラットフォームや採択事業がメディアで取り上げられることによって、横瀬町の知名度アップに直結してくる。お互いのウインウインの関係を構築していくことが、よこらぼの持続力を保つ秘訣でもある。町の知名度上昇が、関係人口の増加へも、ゆっくりではあるが着実に繋がってきている。

官が民のスピード感に合わせ、 行政の意識改革へ

よこらぼだけではないが、このような官民連携事業の進捗において、ややもすると障壁となるのが、双方の「スピード感」の違いだ。その点、よこらぼでは毎月一回審議会を行うなどし、できるだけ民間のスピード感に合うように、これまでの行政のスピードをギアチェンジして対応している。これが役場内に思わぬ波及効果を生み、行政全体の意識改革、スピードアップにとつながっている。

更なる飛躍、新たなステップを

全てが上手く行っている感じもあるが、いくつか新たなステップへ向けた課題がないわけではない。それが、事業の可視化と町民理解の向上である。企業誘致やハコモノ建築と違い、ソフト事業中心のよこらぼの事業は町民にとって見えづらいところだ。

また「官民連携プラットフォーム」と言っても、なかなか理解できにくい側面もある。特にインターネットやSNSを使わず、横文字にも弱い高齢者等に対しては、よこらぼの事業に住民参加という形で参画を促し、町の住民がより実感できる展開への取組みも求められる。

これまでは、敢えて敷居を低くして提案者のやりたいことを幅広く多くの事業を募集してきた。今後は、例えば自由部門と課題部門（町がテーマを提示）に分類し、町の課題解決に直接合致させるなど、更なる飛躍のため、どのように「よこらぼ」を機能させるか考える時期でもあり、どう変化するか期待されるところでもある。

最近の「よこらぼ」主な事業紹介

	プロジェクト名	プロジェクトの概要	提案者
1	食と農の未来をつなげるプロジェクト	都内小売店で町の新鮮な野菜をフードロスの観点から、量り売りにて販売	民間企業
2	みまもりあいプロジェクト	「搜索支援アプリ」と「緊急連絡ステッカー」を使った仕組み	一般社団法人
3	Kids 職業体験スマイルフェス in ちちぶ	子供達が職業体験できる親子参加型イベント	公益社団法人
4	横瀬町を日本一のアウトドアの町にするプロジェクト	キャンピングカーを基点としてアウトドアファミリー層を中心に誘致	民間企業
5	横瀬獣害対策振興プロジェクト	有害鳥獣対策の強化・狩猟後継者の確保や観光資源の創出につなげる	個人
6	電動キックボードシェアリングサービス「LUUP」	電動キックボードのシェアリングによる町民と観光客の新たな移動手段	民間企業
7	まごころポスト	祖父母と離れて暮らす家族をつなぐデジタルポストの導入	個人
8	古民家を活用したまちづくり	町内の古民家を観光資源の一つとして利活用	任意団体
9	腸活プロジェクト～腸を鍛えてリア充な学校生活を～	中学校の生徒にヤクルトを継続的に飲用してもらい、健康意識の向上	民間企業
10	会員制の農業体験&農家民宿プロジェクト	有料会員制で地元農産物の受け取りや農業体験や宿泊などのサービス提供	民間企業

■「どぶろく特区」認定（2017年5月採択）

構造改革特別区域法に基づいて、内閣府から埼玉県内に自治体として、初めて「どぶろく特区」の認定を受けた。酒税法で定められている年間6kl以上の醸造に満たなくても酒造りが町内全域で可能となった。町内のそば生産者団体である「横瀬そばの会」が、よこらばに提案した事業が認定のもとになっている。町内の寺坂棚田等で栽培されたコシヒカリを使って作られたのが、どぶろく「花咲山」だ。9月には町内のエリア898で試飲会が開催された。

■オープン&フレンドリースペースエリア898（2018年5月採択）

横瀬町や秩父地域出身の若手クリエイターらが結成した任意団体である「モサーズ」が提案し、採択された案件である。町による地域活性化に向けた町内ヒアリングやワークショップなどを開催したところ、「気軽に立ち寄れるスペースがない」、



どぶろく試飲会

また都内からくる多くの応募者などから、「町民の皆さんから気軽に意見を聞ける場所がない」などの意見が寄せられていた。そこで公共遊休施設（JAちちぶ横瀬支店併設の旧特売所）の活用、地域の内外の人が交流が出来るスペースを民間が運営していくという事業となった。2018年11月からモサーズを中心に活用方法などを打合せして、SNSで集まったボランティアによって、改修工事も行われ、オープンとなった。

■小児科医による「どこでもオンライン相談」（2018年2月採択）

小児科オンラインに登録する小児科専門医に、無料通信アプリLINEのテレビ電話やチャットなどを通じて、気軽に相談できる事業である。横瀬町には小児科医院が1軒もなく、町内の小児医療の補填にもなり、子育て世帯の負担軽減にも寄与することになっている。

■バスロケーションアプリ「見えバス」（2018年5月採択）

株式会社マネジメントシステムが開発したバスロケーションアプリ「見えバス」を横瀬町コミュニティバス「ブコーさん」に試験的に導入して、利用者から意見をもらうことにした。これまでの町内のバスサービスに、バスの所在地や運行状況が分かるという新しいサービス加わることで、乗りやすさや待ち時間の短縮となり、町民だけでなく、観光客への利便性向上にもつながっている。



エリア898の外観（写真上）と内部（写真下）



横瀬町 富田 能成 町長 インタビュー

インタビューー：松本 博之
(ぶぎん地域経済研究所 取締役調査事業部長)



—どのような思いで、2009年に横瀬町に戻られましたか？

●衰退する故郷を何とかしたい

前職で銀行に20年間勤めていました。特に最後のところは、不良債権や企業再生に関わる仕事をしていました。そういう中で衰退していく地方を、全国でいろいろなケースをたくさん見てきました。人口減少が続いて、経済規模も縮小していく地方を何とかしたい。取り分け、自分の故郷を、何とかしたいという思いが募りまして、横瀬町に帰るといふ決断をしました。

—2015年に町長になられました。どのような思いを持って選挙に臨まれましたか？

●横瀬町の危機と希望を一緒に訴えて

実は、帰郷間もない2011年の町長選挙にも立候補して落選しているんです。2015年に当選した時と主張していたことの基本部分は同じで、ずっと一貫して、人口減少を何とかしたい、人口減少に正面から向き合っただけでなく、組織対応していくと訴えました。

しかしながら11年の時は、ちょっと時期が早すぎたのかなと思います。町の皆さんに私自身と私の主張をわかっていただくまでに4年という歳月が必要だったのだと思います。2015年の選挙では、横瀬町の将来への危機感が11年よりも町民の方に受け入れられた結果だと思います。

町の皆さんに伝えたかったのは、危機感だけでなく、希望とのセットです。片方だけでは駄目です。こういう町ですから、できるだけ多くの人を巻き込んで進めていくに当たっては、この2つはとても大事で、まず危機感が共有できていることです。次に希望が共有できていることは、ベースとして、非常に大事だと思います。

希望というのは、この町は人口減少が続いているけれども、非常にポテンシャルがある町であるということです。

略歴

1965年横瀬町生まれ、熊谷高校～国際基督教大学卒
1990年～2009年 日本長期信用銀行（現新生銀行）勤務
2011年 横瀬町町議会議員
2015年 横瀬町町長、現在2期目

その1つ目は、田舎で美しい山々に囲まれて、里山のきれいな風景があり、自然環境に恵まれている点。2つ目として、コミュニティが非常にしっかりしていて、住民の皆さんの社会的意識が高いという、人の側面。3つ目がアクセスです。それでいて都会から近い。美しい田舎で人の和がしっかりあって都会に近いということです。

この3点を持っている地域はなかなかないと思っています。これは横瀬の大きなポテンシャルということです。加えて、小さいということ。小さいハンデはたくさんありますが、小さいメリットもありまして、動きが速く、ベクトルをそろえやすく、スピーディに対応できるということです。それがあるので、危機感を共有して、横瀬の強みを十二分に活かすような施策をやっていけば、必ずこの町はよくなるということを訴えました。

—「横瀬町地方創生総合戦略」のなかの大きな柱について2～3つ紹介していただけませんか？

●キーワードは人口減少対策

地方創生総合戦略は、私を含む全職員が関わりました。もともと人口減少対策を施策の主テーマに挙げるということ、職員の皆とは共有しています。地方創生総合戦略でつくった施策は、全て人口減少問題に関連していて、大きな2つの柱があります。

1つは、人口減少を抑制するということです。人口減少を抑制するということは、出生数を上げるというのもそうですし、社会増減のマイナスをできるだけ少なくしていくというのもそうです。

もう1つは人口減少に備えるということです。私は人口を増やすという話はしていません。ただ減少幅を緩やかにして、どこかで減り続けられないようにしたいと思っています。

そのためには、やはり減少していく前提でいろいろな組み立てをする必要があります。町をコンパクトにしてい

財政的にバランスを取ってやっていこうと思いました。これは全て地方創生総合戦略の中に盛り込んでいます。そして町をオープンにして、外から「ヒト・モノ・カネ・情報」を継続的に呼び込んでいく。それで町中にある資源と合わせて活性化を促すということを志向しました。

——「よこらぼ」3周年を経て、感想や実績への評価についてお聞きします。

●まずは、期待以上の成果

3年間の流れを振り返って見ますと、いいかたちになってきていると思います。始めたときは、月に1回ぐらい応募があって、その内2つか3つ採択できるぐらいの思いだったのですが、はるかに多くの案件を提案していただいて、活況になっています。提案していただく質、量ともに右肩上がりにあると思います。

その中で最近の傾向としては、よこらぼの名前がわりと浸透してきたこともあって、地元からの提案が増えました。

よこらぼ自体は、期待以上にいい展開になっているのですが、住民理解というところは、不十分なところもあります。成果が可視化できない部分もあり、また事業名などに横文字が多いというのもある。特に高齢者の方に、なかなか理解していただけないというのは、肌感覚としてあります。

●官民連携のスピード感

官民連携を進めるためには、やはりスピードがすごく大事だと実感しています。官と民が連携するときの一番のギャップは、やっぱりスピード感だと思います。ですから、できるだけ民間の皆さんを意識したスピードにしたいと思い、かなり速く進めました。なので、もしかしたらここに来るまで説明不足もあったかもしれません。課題や反省点は勿論多々ありますが、それでも私が、町の皆さんに約束したことが、「この町の未来を変える」、「未来を変えるためには、チャレンジが必然的に必要」ということでしたので、これからもスピード感を持って進めていきたいと考えています。

現在、よこらぼの採択案件は61案件ですが、その中で予算を使ったのは2つだけです。あとは基本的には予算を使わないプロジェクトです。町の施設をただで開放した、もしくはイベントを一緒に行ったというのがあります。町民のマンパワーは提供する、場所も提供する、それから町の信用力も、名前も貸してあげるわけです。官民がwin-winの関係で、スピード感を持って取り組んできています。——「よこらぼ」への今後への期待や展望についてお聞きします。

●町をオープンにして、ヒト、モノ、カネ、情報を呼び込む

よこらぼがうまくいったのは、仕組みありきではなくて、「モノ」ありきでもなくて、「コト」ありきというか、あるいは「ヒト」ありきと言ってもよいでしょう。「ヒト」がいるから、新しい展開がどんどん広がって行きました。いまの私たちが培ったネットワークや人脈を使うと、結構いろいろなことがうまくできるのではないかという気もして、そこにチャレンジしたいと思っています。よこらぼは目的ではなくて手段です。町をオープンにして、外から「ヒト・モノ・カネ・情報」を呼び込むということを一歩低コストで合理的にできる手段ということなんです。

横瀬町のいまのステージとしては、多くの人々に知っていただくということが大変大事なステージです。例えば、秩父市はみんな知っていますが、横瀬町はほとんど知られていません。やうと、よこらぼで少し知ってもらえるようになった町です。知ってもらうことから始まりますので、これから、より踏み込んだ、例えば移住促進策、あるいは起業支援策をやるにしても、町の知名度がないと話にならないのです。なので、よこらぼで、ある程度知名度が上がって、人が来てくれる流れができると、また次のステージでできることがあると考えています。

●よこらぼは“リスクマネジメント”

私は、行政の本質はリスクマネジメントだと思っています。いろいろなリスクから住民の皆さんを守るということです。

よこらぼもある意味リスクマネジメントだと思っています。未来に対するリスクマネジメントだと思っています。世の中が変わってきているのに対応できないリスク。これが非常に大きい。情報の窓を開けておきたくて、よこらぼはその機能も果たしています。

●見える経済循環を作る

よこらぼの課題については、幾つかあります。1つは町の課題へのミート率をより高めていくことが必要だと思います。いままでは何でもありでした。何でも良いとして手掛けてきた結果ですが、これからは地域の課題にももう少しフォーカスしていてもいいのではないかと思います。

もう1つは目に見える経済循環をつくることです。よこらぼを3年間やってくると、それなりのネットワークや人脈、情報が蓄積されてきます。それを使って新しい経済循環をつくるということを考えていきたいと思っています。



—最後に町民の皆さんへ一言、お願いします。

●日本一住みよい、日本一誇れる町へ

私はいつも「日本一住みよい、日本一誇れる町」が最終的に目指す姿だと思っています。そこに向かって近い将来に実現したい町の姿というのは、色彩豊かな美しいまち、多様な幸せがあるまちをイメージして「カラフルタウン」と表現しています。特に人口が減少していくからこそ、余計にそういう町にしていきたいと考えています。

自分たちの固有性を残しつつ、オープンにして、外からいろいろな「ヒト・モノ・カネ・情報」を呼び込み続ける。そして多様なライフスタイル、多様な幸せの姿がこの町に

ある、としたいのです。

最後に、やはり「ブランドを創っていくこと」だと思えます。横瀬町のブランドです。横瀬といえば、「オープンでフレンドリーで人がいつも寄ってくる町」「イノベティブな動きがいつもある町」「若い人がたくさんいて、ワサワサ仕掛けているような町」というような、そんなブランドを創れると思います。町の未来は自ら変えることができるのです。過去は変えられませんが、未来は自分たちで創ることができます。一步一步、町の皆さんとともに進んでいきたいと思えます。

●武蔵野銀行との提携事業

“日本一住みやすい町づくり”を進める横瀬町は武蔵野銀行と、2016年6月に「まちづくり戦略連携協定」を結び、15の分野で協働してまちづくり事業に取り組んでいる。

金融機関と地方自治体が協定を結ぶことは決して珍しいことではないが、「戦略」という文言が入ったものは珍しいであろう。

協働で事業に取り組む分野は、観光振興、教育・スポーツ振興、地域・暮らしの安全・安心、高齢者・障がい者支援などとなっている。また同行横瀬支店には「横瀬町サポートデスク」が設けられ、町政についての町民からの様々な相談を受け付けている。

横瀬町は武蔵野銀行を「地方創生のパートナー」として、武蔵野銀行は横瀬町を「地域金融機関として地域経済の発展のための事業を展開するステージ」として、互いにWin-Winの関係となるように目指している。「名ばかり連携」ではなく、横瀬町の付加価値向上に向けて、着実に実績を上げている。



●立教大学との連携事業

2016年に武蔵野銀行の紹介で立教大学と横瀬町の連携が開始した。その後は、産業連携プロジェクトに基づいて、さまざまな企画を実現させている。

2018年3月には、「よこらぼ」で採択されたイベントとして、「Cafe 寺 s YOKOZE (カフェテラス横瀬)」を開催した。参加者は西武鉄道横瀬駅で受付を済ませ、町内にある札所6番ト雲寺から10番札所東林寺を巡った。

また、秩父銘仙の羽織、レンタルサイクルが貸し出され、各寺では地元名物の紅茶や飲食物などもふるまわれた。



●大宮アルディージャ サッカー教室

サッカーJリーグ大宮アルディージャのサッカー教室は、武蔵野銀行の紹介で、連携が実現した2016年に第1回が開催された。昨年は10月28日(日)の「よこぜまつり」に合わせて、大宮アルディージャの専属コーチによるサッカー教室が開催された。

横瀬小学校と中学校の児童生徒で、未経験者や女子も大歓迎というもので、48人が参加した。大宮アルディージャからU-12コーチ4名が指導に当たり、協賛会社として武蔵野銀行からは2名が事務局として参加した。日頃はプロのコーチから直接、指導をうけることができない参加者にとっては、絶好の機会となっている。「名ばかり連携」ではなく、横瀬町の付加価値向上に向けて、着実に実績を上げている。



考 察

新たなコミュニティの創造による 「関係人口」の拡大、深化へ

ぶぎん地域経済研究所取締役調査事業部長
松本 博之

少子・高齢化、そして人口減少が進行する地域をいかに再生・活性化させるか、いわゆる「地方創生」の各地の取り組みでは、シティプロモーションを行ない環境整備を進め居住者増を目指す「定住人口」の増加や観光振興による「交流人口」の拡大がクローズアップされてきた。しかしながら知名度も高くない小都市、人口1万人にも満たない消滅可能性都市、横瀬町にとっては、それはハードルが高い。いきなり交流人口の増加、定住人口の拡大といっても叶わぬ話だ。このことは横瀬町だけでなく、全国的に多くの地域にあてはまることと思う。

そこで最近、政府をはじめ、メディア等ではじめられたのが、「関係人口」という言葉だ。関係人口の定義は未だ曖昧である。ただし“ある地域と関わりを持つ地域外の人”という点は確定しているようだ。関係人口とは、地域のファン、地域や地域の人々と多様に関わり、地域の課題解決にも関わってもらえる地域外の人で、それらの人たちとのネットワークを構築する取り組みと言えよう。

政府は、関係人口の概念について、専門家の議論やメディアを通じてある程度整理が進んでいるとして、位置づけを明確にした上で、国民への普及を行いたいとしている。単なる移住の前段階と捉えるのではなく、今後は多様な概念である関係人口の類型化を図りたいとしているとも考えられる。

以上の点を踏まえると、よこらぼは、横瀬町や横瀬町の取り組みを積極的に情報発信し、紙媒体をはじめ、インターネット、SNS等の各媒体を通じて横瀬町を知ってもらい、興味をもってもらい、

そして「好きになって、応援してもらえる人たち」を増殖させている。関係人口をいかに拡大させるかの第1ステップとなり、非常に効果的な取り組みである。

関係人口の拡大をこれまで見てきた「よこらぼ」から考察する。

1. 関係人口の構築

～人と人をつなげる、

人と人がつながるプラットフォーム～

よこらぼは、「官民連携のプラットフォーム」であると同時に、人と人をつなげる、人と人がつながるプラットフォームでもあると言ってよい。よこらぼがそのような機能性を持っていることも、これまでの実績を見ればわかる。そして、そこには3つの要素が存在するように思われる。

■人々のつながりをサポートする人の存在

■人々が気軽に集まれる場の提供

■人々を継続的につなげる仕組み

これらが相まって生み出されるシナジー効果が、これまでの実績と関係人口の拡大につながっていると考えられる。

2. 関係人口の拡大と深化へ

～よこらぼに見る

地域の変革と波及効果への期待～

よこらぼの本質は、横瀬町民と地域外の人たちとの対流であり、新しいコミュニティの創造である。横瀬町をステージに地域外の人たちのアイデアや資源をもとによこらぼという共通の価値観に



共鳴した町民とのコミュニティの創造なのだ。よこらぼの3年間の取組みにより、様々な新しいコミュニティが創造され、関係人口を拡大させ、今後の継続的取組みによって深化させ、自治の枠組

みへの変革へも波及効果の期待されるものである。そこで関係人口の拡大と深化、そして将来的な自治体の在り様という視点からまとめた。

これまでの「よこらぼ」

- ・地域内外のヒトの交流によって、地域内に「地域の価値」の自覚を促す。
- ・これまで地域外に発信されてこなかった「地域資産」、これまでにない価値を持ち、さらに広く地域外へ発信にさせる。
- ・地域内外のヒトが自ら触媒となって新しい地域外のヒトを地域につなげる。新しい取組みに波及する。

これからの「よこらぼ」の波及効果

- ・地域内で自ら、地域内の課題に目を向け、これまでの関係人口の人たちを含めて内発的に地域の課題解決に動き出す。
- ・新しい地域の可能性を見出し、地域の未来を変えることにチャレンジが始まる。そしてそれまでの関係人口から地域での活動人口へと変貌し、この連携を受けた新しい自治へ進む。
- ・従来の「秩父郡横瀬町」から地域住民、定住人口、交流人口や活動人口など様々なタイプの関係人口を抱合した新たな自治の枠組みへと変革が求められる。

3. 関係人口を巻きこむ

～「攻め」と「守り」の施策推進～

前述のように「よこらぼ」は関係人口の構築としては、絶好のツールであり、そのように3年間の実績から機能していることがわかる。よこらぼのコミュニティでは、「人」は新たなステージを求めるなかでこれまでとは違う地域との係わり合いを求めている。“何か新しいことを始めたい、そのステージが欲しい”人達と“ステージを提供するので、何か新しいことを始めてもらいたい”という人たちが繋がるこれまでにないコミュニティを創るものだ。そして地域と地域外からの人が興味をもち、関係を持つ人たちが拡大し、進化していく仕掛けづくりである。ここで出来た関係人口は交流人口、定住人口等の活動人口への足掛かりと対流の促進を働かせている。

さて、持続可能な横瀬町の構築に当たり、そのための大きなツールがよこらぼである。そこには2つの側面が程よいバランスで取組みの中に存在

しているように思える。一つは、新規の事業を外部の人の提案による新たな「価値創造」である。横瀬ブランドを創造し、「日本で一番日本一住みよい、誇れる町」と、まさに攻めの部分である。それによって地域の課題解決、生活の維持・向上にしっかり繋げている守りの部分である。関係人口を巻き込んだ新しいコミュニティの力を起爆剤として、攻めと守り施策をうまいバランスで施策推進に繋げている。

おわりに

本稿は、「地域密着型調査レポート」と勝手に命名したが、ある自治体の施策に注目し、首長インタビュー、施策の紹介、そして考察という3部構成で執筆した。お忙しいところ気軽にインタビューに応じていただいた富田町長、本稿の構成について貴重なご意見をいただいた井上副町長、取材の段取りなど面倒をおかけしたまち経営課の山中さん、そして快く取材に応じてくれた町民の皆さんに感謝します。